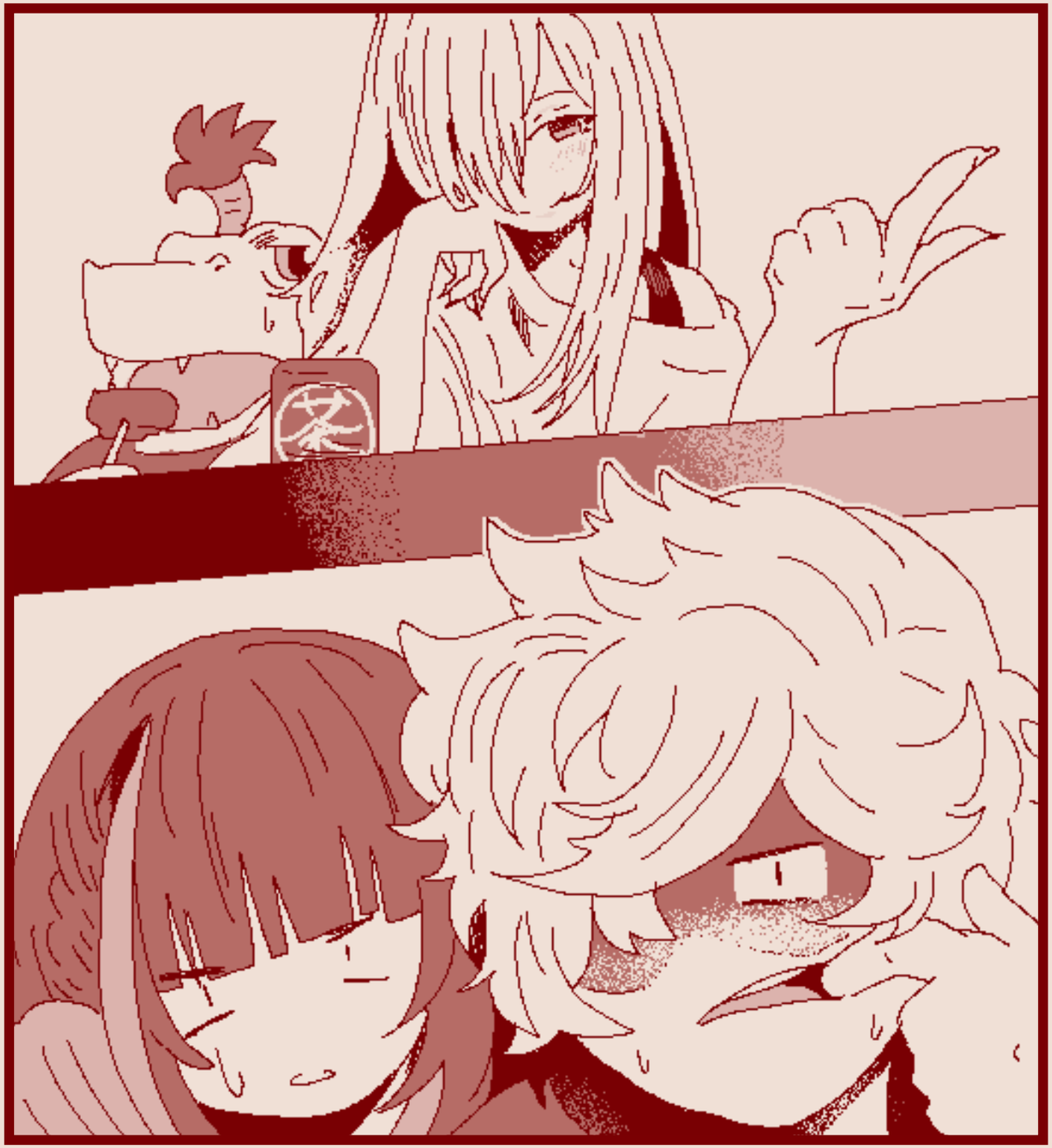
1

　8月初旬の蒸し暑い日であった。
　中学3年生の受験の夏であったが、湿度と暑さのハイブリットに茹だるような怠い気分と古都華の気分はリンクしていた。
　受験勉強にも身が入らず両親の小言を避けて、惰性の様に神社の巫女のバイトに向かった。
　パートナーデジモンであったクダモンも暑さにやられて茹だっている。
「はぁ〜、中学最後の夏になんちゅう色気のない生活や…おとんもおかんもあぁ言ってるけど別にレベル下げてもヤンキー校でもない普通校だって楽勝やってのに…なぁクダモン？」
「そうだね〜フェルナンデスだね。」
「完全に脳溶けとるな、はぁウチの青春ってとんだ灰色やなぁ…。」
　バイト先に着くと神社の神主に珍しい来客があった。
　神主の知り合いの警察官という人物であった。
「おおきに、なんや刑事さんっておっちゃん遂に悪い事に手出したん？いつかやると思ってたで。」
「ちょっと古都華ちゃん出会い頭に酷くないかい？
　あぁそうだ丁度いいや、バイトに来たばっかで悪いけどちょっと、お使いにいってくれないかい？」
「なんや？えらい神妙な顔して。」
「伽夜子さんと古都華ちゃん知り合いだろ？ちょっと伽夜子さんに依頼したくてね。」
「？」
…

　神主の依頼の内容は、この2週間で起きた2つの怪事件の解決であった。
　ある村出身の2名が同じ状態で植物人間で見つかった。
　最初のひとりは、権田 徳三郎（72 歳 ）、二人目は徳田 重蔵（74 歳 ）両名とも独身であった。
　ふたりが植物状態になった要因は不明で医師もなぜ、彼らが突然同じタイミングでこのような状態になったのか皆目見当もつかなかった。
　ここまでなら、通常の警察業務の一環で処理する案件であるが、現場の様子が異様であった。
　糞尿に塗れた被害者達の周りに無数の案山子が立っていた。
　しかし、被害者含め案山子を誰かが搬入する様子は、監視カメラや周辺住民証言から確認できていない。
　被害者のひとりは住宅地で人の目もある。
　もうひとりはタワーマンションでフロントもあり、搬入は不可能であった。
　更に不気味な事に案山子には、ある肉片が組み込まれていた。
　…検査の結果それは、同一人物…つまり人間の肉片と分かった。
　あまりにも不可解な状況かつ、2名とも資産家で、メディアに嗅ぎつけられ荒らされる前に解決するため、科学調査を信仰する警察が泣く泣く知り合いの神社に頼ったという経過であった。

「話はわかったんやけど、なんでウチだけ？警察のおっちゃんと神主のおっちゃんが行くのが筋ちゃう？」
「…あの恰好のひとだろ？
　初見のひとには信用されないだろうし、古都華ちゃん気に入られてるだろ？」
　伽夜子…友人の夜光 月彦の自称姉の新進気鋭の霊媒師でここ数年で弟の月彦を連れ立って幾つかのお祓い…というよりも一般に知られていないデジモンが起こす事件を解決している人物であった。
　その性格は飄々としており、金がありそうなところからはぼったくるは、無関係を決め込んでたら面倒事に巻き込んでくる事で悪い意味で有名であった。
　服装もはっきり言って痴女一歩手前で、一般人が想像する霊験あらたかな人物ではなく、詐欺師若しくはマニアックな風俗の嬢といった体であった。
「んで、本音は？」
「いやぁ、僕もあのひと苦手で HAHAHA！五千石堂の羊羹持ってていいからさ！」
「カス!!」
…

　という訳で、伽夜子達の住むアパートに来た。
　（案外、普通のアパートに住んでるんやな。）
　聞かされた住所のアパートは2階建て、4戸の平均的なお手頃価格のアパートであった。

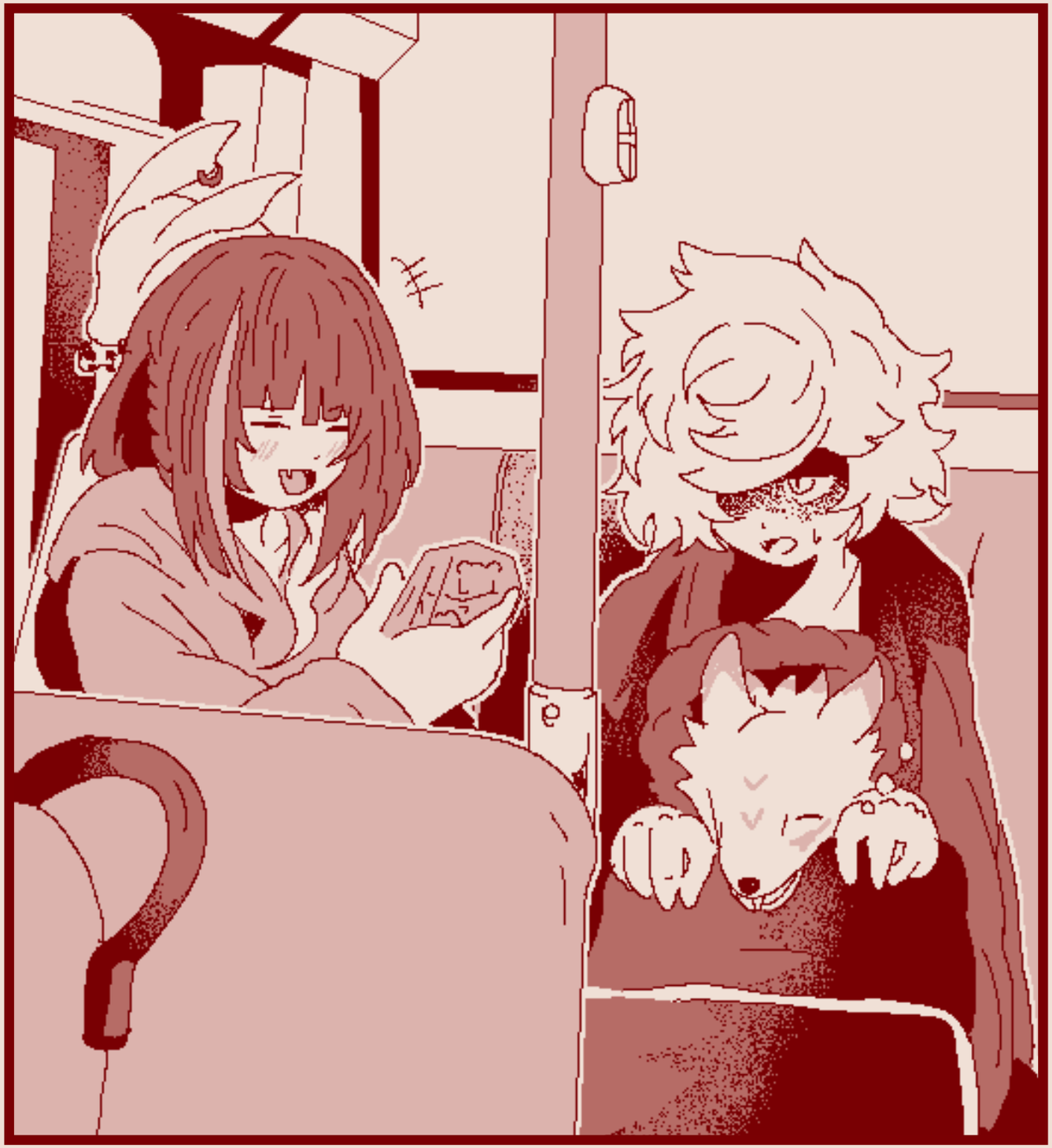


2

「はい…。」
　インターホンを鳴らすと、この世の不幸を一身に背負ったような陰気な少年が出迎えた。
「よっ！元気しとったか！夏バテしてへんか!?」
　出てきたのは、弟の月彦とパートナーデジモンのコヅキガルルモンであった。
　月彦は古都華の神社で起こった事件で知り合った高校生の少年であった。
　優しい少年ではあるが、陰気、声小さい、気が小さい、写真をそのまま掛け軸にでも貼れば心霊番組の幽霊画でも通りそうな負のオーラに溢れているような少年であった。
　近所だったのもあり、そんな月彦を古都華は放っておけず度々絡んだり、世話を焼いていた。
　しかし、思い返せばこういった遊びに来るなど道すがらではない、プライベートな場所への訪問は初めてであった。
「えっ…古都…ちゃんさん？どうしたんですか？」
　月彦は以前、古都華をさん付けで呼んでいたが、余りにも他人行儀なのが古都華は気に入らずなんとか呼び捨て、妥協しちゃん付けを強要した結果、珍妙な古都ちゃんさん。という呼び方になっていた。
「あ～、ちと伽夜子さんに頼み事あってな。
　ほら、五千石堂の羊羹！一緒に喰おうや！」
「おんや？古都ちゃんじゃないか。
　どうしたんだい？愛しい私に会いに来てくれたのかい？
　ま、入りたまえ。お～五千石堂の羊羹じゃないか、月彦君麦茶出してくれたまえ。」
…

　クーラーが適度に効いた温度、それを少し古めかしい扇風機が部屋全体に送っている。
　部屋は本来、洋装であるが、そこに畳を敷いたどこか懐かしい雰囲気であった。
　ぼったりく等で稼いでいると思っていたが、想像以上に質素な生活空間であった。
　午前９時30分を回った頃合い、レースから漏れる夏の日差しが心地良さを増させていた。
「成程…また、面倒臭そうな案件じゃあないか。
　いいよ。羊羹も頂いたしいいよ引き受けようじゃないか。」
「え～、おっちゃん暑い中働くの嫌なんだけど…。」
　伽夜子のパートナーデジモンのブシアグモンがいの一番に羊羹を頬張り一番嫌そうな態度を取っていた。
「羊羹2切れ食べといて逃げられるとでも？羊羹分働いてもらうよ？」
「ほんまか？助かるわ～。
　ほな、どうするんや！ハキハキ指示出してくれ！ウチも手伝うで！」
「いや…古都ちゃんさんは…。」
　月彦がおずおずと意志表示をする。
「あ゛～!?何水臭い事言ってんねん！」
「ですけど…聞いた話じゃ危ないですし…そもそも受験勉強しないと…。」
「なんやと～月彦が随分言うようになったやないか！ええこの！」
「…いはいれすよこひょひゃんひゃん。」
　古都華が月彦の後ろに回り込み口を引っ張る。
「ふふ…その辺にしといてあげてくれ古都ちゃん。
　月彦君がそこまで言うのは結構珍しいんだよ？お姉ちゃんが嫉妬するくらいにね。
　だから、気持ちを汲んであげな？」
「せやかて、伽夜子さん！」
「ふふ、私は行くなと言ってない。
　むしろ今回は危なくない範囲で是非協力してもらうよ？せっかくの夏休みだしね？」
「かよほひゃん…！」
「えっ、言っといてなんだけど拒否られる思てたわ。」
「被害者がこれ以上でないように、私は被害者が出るのを防ぐ事に注力したい。
　月彦君は戦闘面はともかく結界やらは駄目駄目だしね、私が適任だろうから。
　ふたりには、事の起こり、今回の原因を探ってきて欲しい。」

「「それって…。」」
「ふふ…私の勘だけどね、せっかくの夏休みだ。
　古都ちゃんの気分転換も兼ねて、二人でひと夏の冒険に行ってもらうよ。」



3

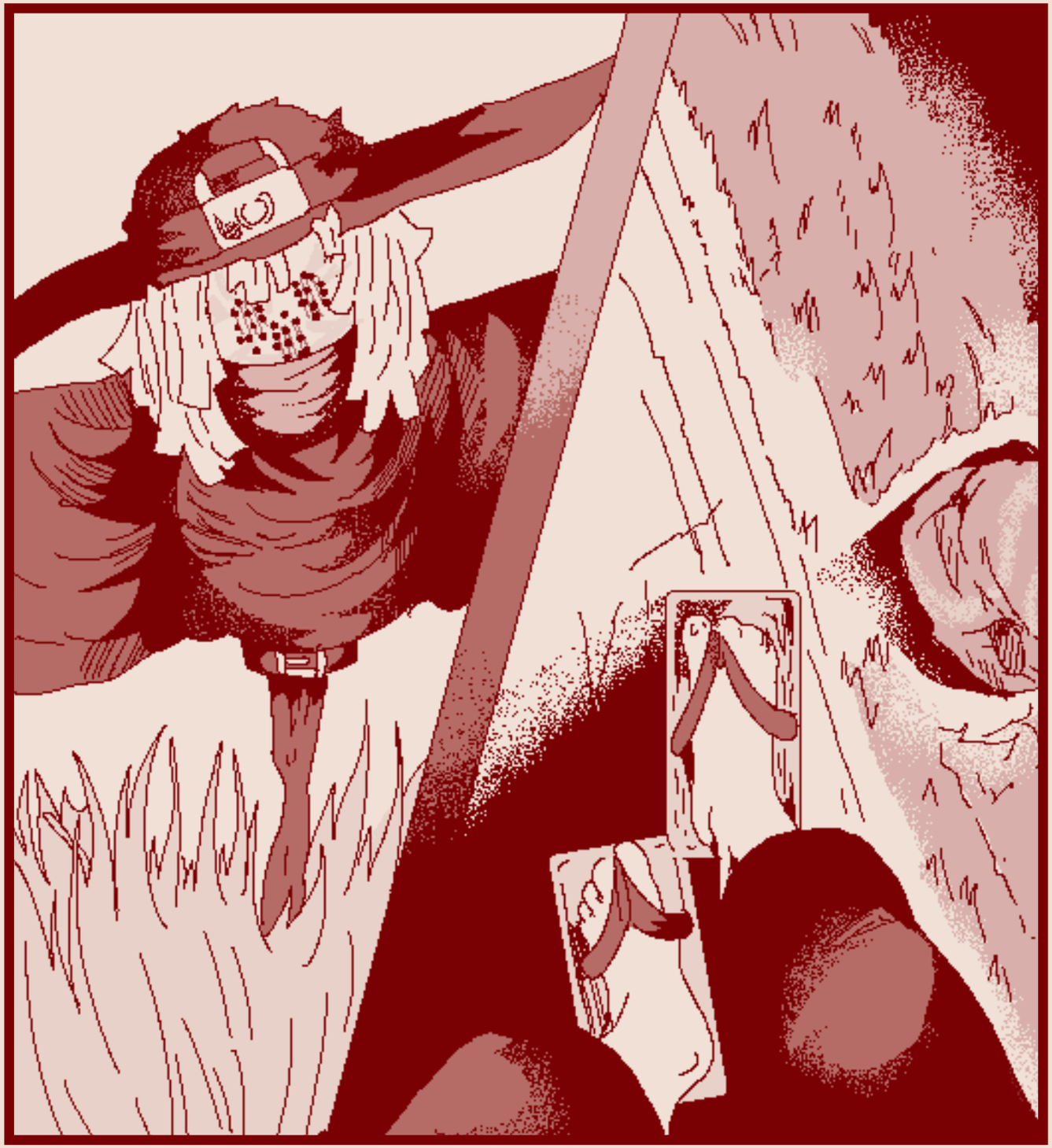
「いやぁ～驚いたわ、話出てからトントン拍子で話進んでビックリやわ。
　流石、伽夜子さんやで！」
　伽夜子から二人に頼まれたのは、被害者の2人の出身の村に今回の事件の原因がないかの調査であった。
　根拠は伽夜子の勘であったが。

「あの…良かったんですか？神社の方とかご両親とか…。
　1、2日とは言え、泊まりですし…。」
「ああ？原因調査だし矢面立たんから、気分転換に危なくない程度に頑張れってな！
　それよか男と二人旅の方がおとんブチ切れてたわ！
　帰ったら殺されっかもな君！ナハハ！」
「えぇ…。それ…大丈夫じゃないんじゃ…。」
「安心せえ！んな度胸ないヘタレ言うてなんとか納得させたわ！あっコアラマーチ喰うか！」
「…はは、いただきます。」
「古都華、ワタシも！」
「おう！喰え喰え！ワンコも喰うか!?」
　クダモンが美味しそうに咥え、コヅキガルルモンは我関せず、舌を出して鼻息を立てていた。

「ほんで、その行く村ってどんなとこなん？
　新幹線乗って来たし、結構な田舎っぽいのは分かるんやけど。」
「あっはい。
　蛇穴（さらぎ）村ってとこで、人口2千人程度の小さな村です。
　高収益作物の柘榴の産地で一部結構有名ですね…。
　隣接市はかなり大きいですね…。
　あっ明日、結構大きいお祭りあるみたいですよ…。
　ただ、果樹の収益や、今回の被害者2人もそうですけど名士をかなり排出してるとこみたいで合併はしてないみたいです。」
「なんや、ごっつ臭いそうな村やな。」
「…えぇ、あと毎年必ず1名以上若年者の行方不明者が出てます。」
「…なんか、もうこの時点で危険ちゃう？」
「…だから言ったじゃないですか…でも、伽夜子さんがああ言うって事はまぁ、僕らだけで対処できる範囲って事だと思います…多分。
　とりあえず、怪しまれないために文化部でフィールドワークの一環で行くという体で…今日は軽く様子見と今後、部外者がうろちょろしても噂になってもいいように役場へ挨拶に…。
　電話はしといたので…。」
「手際いいやんけ！見直したで！」
　古都華が月彦の背中をバンバン叩く。
「はは…ありがとうございます。」
「しっかし、なんや結構気引き締めなあかんかもな。」

4

　トンネルを抜け、バスから降りるとそこには田舎の原風景が広がっていた。
　田んぼの稲が風に気持ちよく揺れ、ひぐらしの鳴き声が響き渡っている。
「あ～ええなあ！こういうの！古き良き田舎って感じ…ウチも華の JC やけどこういう素朴なのもたまにh…。」
「はは…涼しくていいでs…。」
「「…はぁ…。」」
　ふたりは、併せて溜息を吐いた。
「君達？観光か？ここら辺じゃ見ないが？」
　近くで田んぼの手入れをしていた初老の男性が話しかけて来た。
「へあ!?…え…あ…あの…がが学校「学校の部活や！ウチら文化部で民俗学勉強しとってな！そのフィールドワークや！」
　（あ…ありがとうございます。）
　（まかせとき、こういうのは任せとき！）
「あ…あぁの蛇信仰について…珍しいのが…あるってっ、役場の方にも連絡しれまふ!!!」
　男性は怪訝そうな顔をしていたが、月彦の言葉を聞いて警戒を解いた。
「お～珍しいな、ミシャクジ様の事か。
　たまに来るけど、君らくらいの年齢の子は珍しいな！」
「ははは、ご迷惑おかけします。」
「いやいや、ちょっと前の事件からデジチューバーだかなんだか変なのがうろちょろしててな！迷惑してんだよ！
　君らも気を付けなよ！あいつら礼儀もあったもんじゃないから！」



5

　ふと、月彦が足元にに目をやるとそこには特徴的な石があった。
「これって蛇石ですか？」
「おお、流石だね、村との境にあるんだよ。
　これも他のとこと比べて多いって結構特別らしいぜ？」
　蜷局のような模様のある石があった。
「それよかデジチューバーが来始めたってのはやっぱこれが原因なん？」
「うん、あぁ？知らない？去年、村の私有地で焼死体の遺棄事件あったんだよ。
　それから、デジチューバーが勝手にうろちょろしててたな。
　んで、嬢ちゃんが言う様なこれでな…。」
　男性が指さす先には、案山子があった。
　月彦が境界を一歩踏み越えた瞬間であった。
　異様な気配が身体を走った。
「古都華、月彦はん。」
　古都華の後ろにいたクダモンが話しかけてくる、その様子は少し緊張しているようであった。
「それとな、これはこっそりと絶対他言無用でお願いなんだけど、ここで何かするなら上（かみ）の連中には気を付けな。」
「上？」
「そ、役場行けば見えるけど段々になってる土地の上の連中。」
（異界だ…。）
　蛇石を越えた先、そこは異界、デジタルワールドに近い世界になっていると月彦は感じた。
「あぁ、これ？ほんと迷惑してるよ。
　そのデジチューバーがある事ない事動画にしてなぁ…明日は祭りだってのに。
　誰か知らないけど、役場が撤去しても毎回すぐ立てられんだ。
　なんか生肉入ってるとかで、虫が湧くと稲も病気になっちゃうしな。」

6

先程、月彦達が溜息を吐いたのはこの光景と臭いであった。
　蛇石の先、境界の先…そこにはおびただしい数の案山子が立っていた。